



空

sora

夜明け

僕があの日見たあの景色。
それは今でも目の前にあるかのように鮮明によみがえる。

うちはいわゆる母子家庭というやつだった。
父親がいないこと。それを何度も同情されたが、それは僕にとっては当たり前すぎる事実で、特別悲しいと思ったことはない。それは、雨が降ったらカサをさすのと同じくらい自然なことだった。
もちろん、うらやましいと思わなかったといえば、嘘になる。「パパにゲームを買ってもらった！」と言う友達はとてもうらやましかった。
でも、それはゲームがうらやましいのであって、父親という"わけの分からない"存在がうらやましい訳ではなかった。
今思えば、こたえたのはむしろ母親がいなかったことだと思う。
例えば、授業参観だ。
教室の後ろに居並ぶ母親たちのなかに自分の母親がいたことはなかった。
「おかんきてやがるぜ。ウゼエー」
と言いながらも、張り切って手をあげる級友に、いつも理由のわからないイライラを感じていた。

その時の僕は、その気持ちを素直に表現するほど幼くもなければ、その気持ちの理由に気づくほど大人でもなかった。

だから、授業に参加せず、ずっと窓の外を眺めていた。その日はとてもよく晴れていて、校庭では旗が風にゆれていた。授業も聞かずその旗をずっと見ていた。

夏も終わろうとするある日、僕は母と激しく言い争いをした。
なぜ言い争ったのか、もうよくおぼえていない。きっと、きっかけは帰りが遅いことをとがめられたとか、そんな些細なことだったと思う。
「こんなだったら、生まれてくるんじゃなかった！」
怒りに身を任せた僕は、母を言い負かしたい一心でその言葉を叩きつける。
僕以上にまくし立てていた母が、何かを言い返そうと口を開きかけたが、それは永遠に言葉にならず口を閉じる。

一瞬前までそこにあった怒りは嘘のように消え、母の瞳には悲しみの色が宿る。
母のその瞳の色は、どんな言葉よりもこたえた。

僕は何か負け惜しみのような言葉をはいて家を飛び出した。

むしゃくしゃした気持ちをかかえて、自転者を風のように飛ばす。いつもの夕日に染まった街が後ろへと矢のように流れていく。僕の心臓はどんとどんと鼓動を早め、すこしづつ息が上がって行く。でも、僕の気持ちは冷めて行く一方で、必死にあの言葉を正当化しようとした。母が悪い理由を探し続けた。

そう、僕はすこしも悪くない。悪いのは全て母なのだ、と。

よく知った風景がよく知らない風景に変わる頃、僕は速度を落とし自転者から降りた。あたりはすっかり暗くなり、外灯に明かりが灯る。

行き場を失った僕は、なんとなく人のいない方へととぼとぼ歩き続けた。

「そう、僕は悪くない」

つぶやく僕の声は誰の耳に届くこともなく、満天の星空へと吸い込まれて消えて行った。

気がつくやうに、丘の上の公園にいた。

見晴らしの良いそこからは、天上の星よりもずっと明るく光る地上の灯りが見える。僕はほとんど無意識に家のある方角を眺めるけれど、遠すぎるうえに他の灯りに紛れてわからなかった。

ああ、じゃあ母からもここは見えないんだ。

眼下から吹上げる夜風は、ひんやりと僕を冷やす。僕の芯を青色でそめる。

なんであんな言葉を言ってしまったのだろう。

そして、なぜ母があんな表情をしたのだろう。

僕には分からなかった。分からなかったけど、母を傷つけたことだけはわかった。あの言葉は、きつと言ってはいけない言葉だったことだけはわかった。

今すぐ家に帰り、母に謝りたい。でも、僕のなかのちっぽけなプライドと、膨れ上がる気まぐさが、僕を家に帰すことを拒む。

僕は公園の芝生に腰掛けて、空を見上げた。

空ってこんなに星があったんだ。

僕はそのまま芝生に倒れこむ。すると、僕に見える世界の全てが夜空になった。

その時の僕は星座なんて何一つ知らなかったけど、目に見えるもの全てが一つの絵のように見える。

儂い光を放つ星々。夜空のはしで存在感を放つ三日月。そして青色に染まる世界と僕。

とてもきれいで、そう、きれいでたまらなく寂しくて・・・

「朝日をみたら、帰るんだ」

僕は太陽を見たかった。たまらなく見たかった。

初めて家出をしたその夜、星空を見上げながら僕はいろんなことを考えた。

母のこと、よく知らない父親のこと、学校や友人のこと、そして僕自身のこと。僕の将来。

何一つ結論が出た訳じゃないけれど、それでも考え続けた。そして、考え続けて思ったのが、これからは自分の意思で生きて行かないといけないということ。

うまく言えないけれど、今までの僕は流されていた。先生がいうから何かをする。友達がいうから何かをする。そして、母親のせいで家に帰れない。どこかでそう思っていた。

でも、本当は違うんだ。今だって帰ろうと思えばいつだって帰れる。僕はいつだって僕の思うようにどこにだっていける。なぜか唐突に生きるってそういうことなんだと思えた。

でも、今は帰らない。僕は朝日を見ると、僕自身が決めたから。

そして夜が開ける。

ほんの少しづつ 空が白くなっていく。本当にゆっくりと音もなく。

朝の空気は冷たかった。だからすこしづつ明るくなるのがあたたかく、うれしかった。

そして、いよいよ太陽が姿を見せる。

僕の顔を今日に生まれたての光が照らすけれど、昼間の燃やし尽くすような光とは違って、とても優しく、あったかい。

ああ。これが太陽なんだ・・・

胸の奥によく分からない、笑いたいような、それでいて泣きたくなるような気持ちがこみ上げてくる。

そう、どこか懐かしような・・・

優しい光は、氷を溶かすように僕の芯をほぐしていく。

「帰ろう」

僕は空に向かってつぶやいた。

僕は僕なりに生きる決めたのだから。

家に帰った僕は、さっそく母親にすごい剣幕で怒られた。潔く謝るつもりでいたのだけれど、あまりの母親の怒りに小声で二、三言言い訳すると部屋に逃げ帰ったのをおぼえている。

そしてそれから月日はたち、以前はよくわからないと思っていた「父親」という存在に僕自身がなっていた。僕が父親にふさわしいのか。それは僕には分からないけれど、僕は僕なりに幸せだと思う。

母は、僕が父親になるのと入れ替わるようにあの世に旅立っていった。

なぜ母親が、あの日の僕の言葉に悲しそうな表情を見せたのか。それは、母親の葬式で祖母から聞かされることとなった。

母の中に僕の命が宿ったとき、父親は僕をおろそうとしたらしい。でも、母親は僕を生むと言いつ張った。そんなこんなで、母は父親と別れることになり、僕は生まれることができた。

今となっては、なぜそうまでして生んでくれたかはわからない。僕の命を考えてくれたのか・・・

・ それとも何か別の思いがあったのか。

でも、そんな理由なんて今は大切じゃない。

母がつないでくれた命を、僕が受け継ぎ、僕が息子に受け継ぐ。

母に感謝しながら。

そして、あの日見た朝日を、もう一度息子と見るんだ。

だから、僕は今日も生きる。明日を目指して。